奈良県吉野郡東吉野村議会

1 政策づくりと監視機能を十分に発揮している議会

① 議会における活発な議論を推し進めるため、本会議及び委員会における発言は一問一答方式とし、回数制限、時間制限を設けずに行っている。また、質問の事前通告はしないこととしており、質問の論点を明確化するため長等に反問権を与えている。これらによって互いに適度の距離感と緊張感をもって会議に臨むことができている。

② 議会及び議員は、政策提言等による、よりよい政策の議論を展開するため、議会基本条例において議員の政策立案及び提案能力向上のための研修を実施することを規定し、平成26年度には講師として市町村アカデミーの客員教授を村へ招き、議員の提案能力向上と政務活動費の使途における留意点等について約2時間の研修を開催した。

③ 村では、議員一人に対し年額12万円の政務活動費を交付し、議員の調査研究、その他の活動を支援しているが、政務活動費の収支報告書の提出とあわせ領収書の原本添付を義務づけており、その支出が明白であっても、領収書の添付がないものは経費として認めていない。

④ 当議会では、総務文教過疎委員会（委員8名）、厚生建設経済委員会（委員8名）の2常任委員会と議会運営委員会を常設しているが、村政運営における重要な課題に関しては特別委員会を設置して集中審議することとしている。

平成22年、過疎・少子高齢化による路線バスの休止、減便が表面化したときには、交通体系検討特別委員会を設置し、路線バスの維持、存続について執行部とともに陳情、要望活動を行い奈良交通の路線バス運行の延長に貢献してきた。

平成24年10月からは奈良交通の路線バスが休止、減便されることとなり、住民の移動手段を確保するため、村がコミュニティバス運行を開始することになるが、委員会において積極的に提案を行い、路線、運行時間について集中的に審議を行った。また、運行開始後も、委員会を解散せずに、執行部に対し利用状況等の詳細な資料の提出を求め、住民の利便性の高い運行ダイヤを構築するよう住民の意見・要望を聴取し、限られた財源の中で最大の効果が発揮できるように最終的なダイヤの見直しがされるまで審議を継続してきた。

3 地域振興のために特別な取組みをした議会

① 自然環境の変化や人間の文化圏のひろがりにより多くの野生動物が地球上から姿を消してしまった。ニホンオオカミも今では、わずかに残る剥製や骨格

からその姿を想像するにすぎない。

明治38年、本村において捕らえられた若雄のニホンオオカミが最後の捕獲の記録となっており、当時、英国より派遣された東亜動物学探検隊員の米人によって買い取られ、現在、ロンドン自然史博物館において動物学上の貴重な資料として、採集地「ワシカグチ・ホンド・ニホン」と記録され大切に保存されている。東吉野村では、村の文化史を彩る貴重な遺産として、広く自然の愛護を希い、昭和62年にブロンズ像を建立し、その雄姿をとどめることになった。

しかしながら、以後、観光パンフレットなどに小さく掲載される程度で、積極的な情報の発信等がなされていなかった。

過疎・少子高齢化によって地域の活力が減退していく中で村の活性化に向けて何か手立てがないか議員同士が話し合う中で、「最後に捕獲されたニホンオオカミを取り戻そう」「ニホンオオカミで観光客を集めよう」という話が沸きあがり、そのためには全員で現地へ行って現状を知ろうということになった。しかしながら、ニホンオオカミは一般公開をしておらず通常では見学できないため、その方策を探りながら、私費で渡英することを決めた。それから2年間の準備期間を経て、ようやく平成25年4月、ロンドン自然史博物館の視察が実現、帰国後、報告書150部を作成し、行政関係者や公共施設、村内の学校、郵便局、医院、また旅館等、集客が期待される場所に配布するとともに、各議員が至る所で「自然環境の保護と“水と緑のふるさと・東吉野村”のシンボル」として情報を発信し、執行部に対してもこれまで以上に「ニホンオオカミ最後の捕獲地」として情報を発信するよう提案をしている。ニホンオオカミを取り戻すには様々な要件があって非常に困難なようではあるが、村には問い合わせや、ニホンオオカミのブロンズ像の見学を求めて来訪される方が増えており、議会ではニホンオオカミを題材にしたイベントの実施等について提案すべく全員協議会を開催して議員間の議論を深めている。

② 東吉野村は、明治維新よりさかのぼることわずか5年、明治維新への魁となった天誅組終焉の地で、無念の最期を遂げた天誅義士の方々を埋葬し、150年を経過した今もなお、村人の温かい手によって供養し守り続けている歴史ある村である。

天誅組とは、幕藩体制の過酷な支配体制を打ち破って王政を復古させようとする行動を起こした志士達である。彼等の精神は5年後に明治維新となって実を結び、立派に受け継がれたのである。

東吉野村ではこの史実を顕彰し、史跡を整備するなどソフト・ハード両面にわたり取り組み、志士にゆかりのある高知県の津野町・梶原町と姉妹町村・友好町村の盟約を結び交流を続けながら文化、歴史の伝承とPRを図ってきた。

しかし、天誅組とゆかりのある地域以外ではあまり認識されておらず、過去

にはNHKで放送されていた歴史情報番組「そのとき歴史が動いた」で取り上げてもらおうと働きかけたこともあったが実現には至らず、これまで脚光を浴びることはなかった。何とかして天誅組をマイナーからメジャーに押し上げたいという願いを持ち続け、執行部、議会がともに苦悩していた。そんな中で、天誅組の挙兵から150年を迎える平成25年が迫ってきた平成22年、天誅組顕彰150年を契機に大々的に記念事業を実施し全国に発信していこう、東吉野村で全国サミットを開催しようという声が議会からわきあがり平成23年度から準備に向けて取り組むよう執行部に提案、執行部では平成23年度当初予算に準備予算を計上し準備室を設置、議会も「天誅組顕彰記念事業特別委員会」を設置し、事業の実施に向け行政に協力するとともに数々の提案を行うことになる。平成23年度には活動が減退していた天誅組顕彰会のメンバーを加えた天誅組顕彰記念事業実行委員会を立ち上げ、天誅組の講座やプレイベント、DVD制作、本イベントとなる記念サミット、慰霊法要についてアイデアを出し、サミットに向けて天誅組にゆかりのある姉妹・友好市町を始め県内外の市町村に対する出演依頼を行政とともに行うとともに、期間中に開催された天誅組連続講座等、全ての行事には全議員が参加しPR活動を展開し、各市町村の議会とも積極的に交流を続けてきた。

そんな中で、平成24年11月には県内の4市町村で組織する天誅組市町村連携協議会が設立され、平成25年には各地で天誅組に関するイベントが開催されるようになり、平成25年7月には天誅組にゆかりのある愛知県刈谷市と友好市町村の盟約を締結するに至った。刈谷市とは天誅組の歴史・文化の交流だけでなく市内の公園の木製ベンチや東屋の設置など産業・経済での親交も始まり、基幹産業である林業の振興にも寄与している。

平成23年度にスタートした8回の講座も、当初は100数名程度の集まりであったが、回を追うごとにリピーターも増え終盤には300人以上の参加者を数えた。講座以外でも天誅組さきがけの道ウォーキング、鎮魂ライブ、追悼特別講演などを実施したが、毎回、予想以上の方が県内外から来場し、平成25年10月26日に予定されたメインイベント「天誅組サミット」には422人の参加募集があった。このサミットは、台風27号接近のためやむを得ず中止をすることになったが同年11月14日、天誅組市町村連携協議会が主催し東京都内で開催した「天誅組シンポジウム in 東京」には約400人の聴講者が訪れ、150年記念事業は無事成功に終えることができた。

平成26年度になっても引き続き天誅組の顕彰事業に取り組み、7月26日、9月28日に開催した催事にはいずれも300名に達するほどの方が参加、11月13日、天誅組市町村連携協議会主催の「天誅組シンポジウム in 東京」でも昨年を上回る約500人の聴講者が訪れ会場は満席となった。

事業開始から天誅組史跡を訪問する観光客が増加し、リピーターや歴史研究を行っている団体からの案内依頼等、行政への問い合わせも増えており、ガイドの養成を含めた対応について今後の検討課題としている。